

10月に入り、朝晩は肌寒くなってきたものの、快晴でぽかぽか、むしろ少し暑いくらいだ、と感じたこの日、私は「第10回 にんぎょうちょうの人形市」へ足を運んだ。人形市は、この400m程もない人形通りに、55店の主に人形を扱うお店が所狭しと並び、地元の夏祭りを思い起こすような催しだ。

そんな人形市が行われている人形町通りの途中の路地から入るより、折角なら通りの始点から行ってみたいと思った私は、人形町の交差点から水天宮方面に向かってゆっくりと、この人形市を見始めた。人形市では、和人形から洋人形はもちろん、55店も人形市には出店されていることもあり、バラエティ豊かな人形の数々を見ることができた。それら人形の数々の中で、印象に残ったものをピックアップさせて頂きたい。



まずはCMをご覧になり記憶されている方も多であろう「人形の久月」の「正統派」和人形だ。さすが、私の故郷愛媛県でもCMを放送している程有名、また天保年間(1830年代)に創業という歴史のある製造業者であるこちらの和人形は、ほぼほぼ人形に対しては知識がない私にとっても、人形の顔・髪や髪飾り・衣装とどれも緻密に、そして美しく見えた。また、微妙に顔の形が3体違うように見えるのも興味深い。こちらの人形の久月のブースでは、ワークショップも開催されており、自分でも人形を作成できるようだった。そこでは主に5~60代くらいであろうか、その年代の女性の方々が集中して、しかし楽しそうに人形を作っていた。



他のお店でも、左の2枚の写真をご覧頂いてもおわかりのように、桃の節句・端午の節句らしい人形や小道具が販売されていた。また人



形の材質も左上の3枚の写真のような(おそらく)木材や石だけでなく、紙、ちりめんといった材質で造られた和人形もあり、気軽に買うこともできる価格帯の和人形も売られていたことも人形市の魅力の一つかもしれないと感じた。

左の「顔が命の」吉徳(1711年、正徳元年創業)の鎧飾り・兜飾りも金色・銀色で彩られ豪華絢爛であり、そして鍬形をはじめ立物(兜に施されている装飾の総称のことを立物というそう)細部まで細かく作り込まれていて、工芸品の魅力を再確認できた。しかし、久月にしろ吉徳にしろ、CMの最後に特徴的なフレーズの入った宣伝の仕方をしており、その意外な共通点を発見してしまい少しにんまりとしてしまった。



前述の和人形とともに、いわゆる洋人形も多く見ることができた。人形特有の可愛さ、可憐さはあるものの、日頃見慣れない私にとっては、ある種の何とも言い表せない不気味さをこれらの人形に対しては抱いてしまうものであるが、それぞれの文化の人形の持つ歴史や髪型・衣装・機能を紐解いてみると、理解が深まり、より身近に感じられるだろう。来年の人形市をより有意義に体験するためにも、少し和・洋人形の歴史と文化を調べてみるのもいいかもしれない。

またいわゆる洋人形ではないが、人形市ではスリランカ、ペルー、ボリビアの色使いがはっきりとしている普段お目にか

かれない人形もあり、人形市の幅の広さも感じた。



そして人形といえば人の形、という漢字を書くが、もちろん、人形市では人を模した人形だけではなく動物をモチーフにした人形やぬいぐるみ、雑貨も数多く販売されていた。例えば上の写真の犬の人形。これらの人形はなんと木毛^{もくめん}という木が土台で、そして装飾は麻や苔といった植物で造られている人形なのである。おそらく染色はしているのであろうが、特に左上の写真の犬二匹の人形の方はリアルであり、思わず見入ってしまった。これほどリアルに、そして手が込んでいる人形であるのに、千円程から販売しており、こちらの価格設定にもいささか驚いてしまった。この他にも十二支セット・ウサギ・フク

ロウ・サルといった動物モチーフの多種多様な人形を販売しているお店があったが、中でも、猫をモチーフにした人形を取扱っているお店が多い印象を受けた。ちなみに下中央の写真の猫 5 匹の人形は、まゆ玉で造られている。年に 1 度の人形市、天気にも恵まれ、大いに楽しむことができた。



さて、これまで多くの人形を人形市で見てきたのだが、なぜ人形町が人形町と呼ばれたのであろうか。そんな素朴な疑問が、人形町というなかなか他では見ることの少ない地名を見ると改めて湧きあがってきた。少し調べてみると、次のようなことだという。なにしろ、1600 年代に現在の中村座(両国の江戸東京博物館に、左下の写真の原寸大レプリカが再現・展示されている。)が人形町で開かれたのを契機に、様々な歌舞伎や人形浄瑠璃・人形芝居の芝居小屋が建てられた。その結果、この地には多くの人形師や人形商人が居住し、人形の作成や修理、商売を営んでいたということから、いつか人形町と呼ばれ始めたそうだ。

ところで、江戸城から現在の人形町の手前の地域にかけて、大名屋敷が多く、また前述のように、いわゆる町人も人形町周辺に多く住んでいた。治安安定の目的もあつたであろうが、そんな比較的裕福な彼らのために、芝居小屋等とは異なるもう一つ遊び場所を、1610 年代に幕府はこの人形町に作った。それが、遊郭吉原だ。幕府は徳川家お膝元の現静岡県駿府からこの吉原建設の為に遊女を移動させたというから、熱量がこもっていたのだらう。それから 1657(明暦 3 年)年の明暦の大火で人形町界隈も被害を受けるまでの 40 年程、遊郭吉原はこの地にあつたようだ(現代、吉原と認知されている地域を新吉原、そして人形町の吉原を元吉原と呼ぶ人や資料も存在する)。遊女達の逃亡を防ぐ為、吉原の唯一の出入口とされた大門から取られたと思われる大門通りおおちんという名の通りが現在も人形町に残されているのが、その名残と言えるだろう。

また、現在の人形町のシンボルの一つといえば、甘酒横丁の交差点と水天宮の交差点の間に位置するからくり時計が挙げられるだろう。午前 11 時から午後 7 時までの毎正時に、落語家立川談幸氏という方の



創作小咄「人形町の由来」が流れ、そして上部の絵の部分が回転し、昔の江戸の暮らしの再現を見ることができる。この時計塔は人形町通りの水天宮を背中にして右側の歩道にある。また左側の歩道の人形町の交差点寄りには、火消しをテーマにしたからくり時計が設置されている。



そして、同じく水天宮を背にして左側の歩道には、人形供養をされている大観音寺がある。左の写真の本堂には、菩薩像の頭部が置かれており、毎月 11 日と 17 日に御開帳されている。この菩薩像は、鎌倉時代に制作、鎌倉の新清水寺というお寺に置かれた後、火災で崩れてしまったそうなのだが、江戸時代、鶴岡八幡宮の鉄の井から発見され、明治 9 年(1876 年)から、この大観音寺に安置されているようで、東京都の有形文化財にも指定されている。こちらにはこの菩薩頭部像だけではなく、韋駄天様やお稲荷様も祀られていた。

人形市を楽しむだけであつたつもりが、つつい散策してしまい、人形市以外のことも紹介してしまった。しかし、さすが江戸時代より続く下町、人形町の持つ歴史というのは深く、まだまだ底が見えない。これからも人形町の「町」も「歴史」も散策して、現代に続く昔の人々の営みや文化、歴史に思いを馳せていきたい。

進藤竜一

人形町簡略図

